

令和2年度第1回山形県環境教育推進協議会議事録

1 日 時

令和2年7月30日（木） 午後1時30分～3時25分

2 場 所

やまぎん県民ホール 2階 練習室1

3 出席者等（敬称略）

(1) 出席委員

大場 里美 大戸 晃彦 澁江 学美 阿部 稔 後藤 正寛
田中 裕子 田中 吉弘 阿部 英子 今村 哲史

(2) 欠席委員

玉谷 貴子 二藤部真澄

(3) 県・事務局

環境エネルギー部長	杉澤 栄一
環境エネルギー部次長	鏑水 功泰
環境科学研究センター所長	安部 悦子
環境エネルギー部環境企画課長	佐々木紀子
循環型社会推進課長	三浦光一郎
みどり自然課みどり県民活動推進主幹	菅原 隆志

4 会議の概要

(1) 開 会

(2) 挨拶（杉澤環境エネルギー部長）

(3) 話題提供

『「SDGs」×「教育」を考える』

（東北環境パートナーシップオフィス チーフコーディネーター 鈴木 美紀子 氏）

(4) 議 事

① 次期山形県環境教育行動計画の策定について

今村会長	<p>それでは、引き続き会長ということでお引き受けしました山形大学の今村でございます。よろしくお願いいたします。</p> <p>これからの議事については、皆さん座った状態で進めていきたいと思っておりますので、私も着席させていただきます。</p> <p>ちょうどこの間の直近ですけれども、最初にご挨拶ありましたが、これだけの川の決壊から何から、今年は非常に自然災害が多くて、毎年のように夏から秋にかけて、日本列島に何かしら被害が及ぶのではないかと考えておりますが、そうし</p>
------	--

た時代の中でよりその根源をたどっていくと、環境の変化であったり、気候変動ということも影響いたしますし、また、SDGsの話をしていただきましたが、これまで、ESD型の10年ということでやってきて、その続きとしてSDGsということが引き続き言われるようになっております。

また、このところの温暖化やプラスチック等、色々な問題が多々ある中で、いよいよ具体的行動を我々がするんだというのがSDGsということなのだろうと思います。そういう時代の中で、山形県としても環境教育に関して行動計画をどう策定していくのか、前回作った時から比較的サイクルが早くなってきていますが、時代的に待ってくれない時代になっているのだろうと思います。

先週金曜日に、大学の環境教育論の授業として、SDGsの話をし、先々週はESDの話をしました。

環境教育の中では、昔から3E+Sということで、エネルギー、環境、経済、それと安全のセーフティーがくっついたということ、SDGsが出るまでこちらの方が比較的前面に出されていたかもしれません。意味合いとしては結局同じことです。環境を守るためには、大事なんだけど経済も回さなくてはならない、エネルギー問題もそこには必ず関わってくる。3Eの場合にはトリレンマでした。あっち立てればこっち立たずという、その中でより良い妥協点を見つけて我々は生きる。まさに今のコロナの状況では、経済を失速させられないし、感染は増やしたくないし、完全にジレンマ状態で、これからどうしていくのか、その中で我々はより賢い判断ができる人がどれだけいるのかということが、これからの我々の普段の生活もそうですし、日本もそうですし、世界的な方向を決めていくのだろうと思います。

その一つのベースとなる能力をつけるための、あるいはその指針、方向性を見つけるものとして、今日のSDGsの話も参考になろうかと思えます。そういう中で、いかに賢い判断をする、意思決定をするかは、どこかの国のトップに聞かせたい感じではございます。私は学生に対して、この状況をいかにより冷静に見て判断していくか、これが先々、次の問題が起こった時に自分たちがどうあるべきかということの参考になるはずと言っています。今回はやってみないと結果は後からついてくるもので、いいか悪いかはすぐには評価できませんが、いずれあとで評価された時にどういう行動をとったのが次への指針になるものと思われれます。

昨年度、山形県教育センターと環境企画課と環境科学研究センターとで環境教育指針を改訂させていただきました。その中では、各学校を中心に取り組むべきつきたい力と次世代の子どものためにということで提案させていただきましたが、今度は、山形県の全員の人たち、県民のための行動をいかにすべきかということをお皆さんたちから提言いただきながら、ここで今年度まとめて最終的に行動計画の策定という方向に向かっていければと思います。

今日は皆様方から、まずはこれまで、昨年から比べるとかなり色々なことがあったので、それぞれの職場なり家庭、社会、地域の中で思われたこと、お考えになったこと、若しくはこうあって欲しいと思われたことがありましたら、まずは

	<p>ここでご忌憚なく意見を出していただいて御議論いただければと思います。</p> <p>それでは、次期山形県環境教育行動計画策定について事務局より説明をお願いします。</p>
事務局	事務局より資料1～資料7について説明
今村会長	まずは、御質問をいただいて、なければ各委員の皆さんから意見をいただくと いう形でご発言をいただきたいので、一人3分程度でお願いします。
大場委員	<p>県教育センターから参りました大場里美と申します。</p> <p>山形県環境教育指針を昨年度作りまして、今年度、色々な機会でお伝えしていく ということを発言したところでしたが、今年スタートの部分で抜けてしまいま した。</p> <p>資料5の課題の一つ目に、「一時的なもの一時的なものにとどまる場合がある」 というのは、非常に学校にいてもそう思いましたし、教育センターの先生方の話 を聞いても、行動はするのですが、それがつけない力の関連とすると、なかなか 将来の行動につながる行動にはなっていないというのはよく聞いています。活動は するのですが、心意気を変えるまでには至らないと正直感じています。まずは、 昨年度作った環境教育指針の普及をし、気軽に、けれども継続的に活動していく ことを通して、先生方自身ひいては児童生徒が活動することが特別なものになら ないようにするのが大事であると思ったところです。それが県の動きにつながっ ていくスタートになる機会だということをお忘れないようにしながら、まずは、昨 年度作った指針の普及をしていきたい。</p>
大戸委員	<p>山形市立西小学校長の戸と申します。</p> <p>4月に酒田から山形に戻ってきました。酒田にいる時は、非常に自然環境に恵 まれところで、鳥海山の裾野から全部見える非常に景色のいい中で生活してきま した。山形生まれですので、山形も自然豊かなことは知っているのですが、 同じ県内でも環境の豊かさというのは様々あると実際に生活してみると分かる と感じています。</p> <p>現在の学校でも最近ビオトープを作っていますし、学校の木が樺の木で、非常 に自然豊かで落ち着きのある学校でいいなと思っているところです。</p> <p>山形市立の学校ですので、山形市はどうなっているか見たところ、山形市では 「うるわし山形スクールプラン」というものを平成17年くらいからやっていて、 環境についての各校の全体計画を作りなさいということですのですすめているよう です。本校も市の教育委員会に提出していますが、中身を見るとやや古い感じがし てバージョンアップが必要とっていました。</p> <p>今年から小学校の教科書が新しくなりましたが、ESDという言葉は出てくる のですが、SDGsという言葉はなかなか出て来ないですね。今、説明を聞いている 時に、ESD、持続可能なということについては今回の学習指導要領の前文にも</p>

入っているくらいですので、扱いとしては、持続可能な社会の創り手を育てるという意識で学校教育をしています。ただ、SDG s という課題に対しては、先程のお話を聞いていると、入口、ツールとして、窓口としてというようなことを強調なさっていたと思いますが、そこを外さないで小学校ではやっていかなければならないと思っているところでした。ややもするとSDG s をやるのが環境教育であったり、様々な課題解決に向かうものだというふうに捉えがちになってしまうのですが、そうではなくて、あくまでもツールなんだということを強調していく必要があると考えていました。

そういった意味で、先ほどの資料6の説明を聞いた時に、持続可能な社会を支える人づくりなのか、創り手を育てるのか、ここについて支えるのかどちらなのかと思いつながら聞いていたところでした。

それから、目指す将来の姿の中の1番目で、小学生中学生を指導していると、「正しく理解し」ということばと、「当たり前実践して」ということばのところが、実は理解の中でもさらに段階の高いのが正しく理解であって、実践している中でも当たり前に行っているとはさらに価値の高い実践の姿であるので、そこについての目標をどこに設定するのかということ、スタートする前に検討しておいた方がいいのかなと思ってお話を聞いていました。

資料6(1)の学校における県環境教育指針の普及浸透ということについては、誰がするのかという位置付けをはっきりさせておいた方がよいのではないか、学校がすることなのか、学校以外がメインですることなのか、双方なのかということについて確認が必要かと思いました。そして、最初に言ったことにつながるのですが、SDG s を取り入れたESDの推進ということで、SDG s を取り入れるということばをここに入れることに対して、各学校が困るといふか、少し判断に悩んでしまうのではないかと心配になったところでした。各学校で創意工夫を生かしながら現状も様々な取組みをしていますので、現在の創意工夫を生かすというようなことばなども必要なのではと思って話を聞いていたところでした。

澁江委員

新庄中学校の澁江と申します。

私は退職まで3年というところで新庄中を預かり、1年経ち2年目になりました。

皆さんご存じのように、コロナで様々な教育活動が停滞している状況で、合唱は出来ない、今の1年生は新庄中の校歌さえ歌えない状況にあります。それから、グループ活動も出来ない。そういう中で、昨年1年目に、教頭の方にSDG s で学校づくりをしたいと話をしました。もともと英語なので、そうすると英語をやることの意味も分かるのではないかと、グローバルに考えることの必要性、そのためのツールとしてのSDG s と英語ということで、色々考えてきたのですが、2月に環境企画課主催のSDG s の研修会に研究主任と一緒に出席してということ考えていたのですが、残念ながらこういう事情で研修会は中止となったという状況にあります。今、職員の方には、SDG s と人権教育とJRC活動、JRCは気づき、考え、実行する、まさに、知る、考える、行う、講師の方がおっし

やってくださったようなものに通じると思います。一本一本のもので迫っていくと学校ではなかなか辛い。例えば、いじめのこともやらなければいけない、今、コロナの第2波、第3波が来た時にオンライン授業が出来るようにということもやっています。それから、昨日一昨日の大雨被害のことを考えると防災教育も適時しなければならない、そういったことが一気に学校の方に降ってきますので、そういった時にSDGsの視点から、色々な事が考えられるのではないかと思います。

人権のこともそうですし、人々がみな公正でなければならないということ、今回のコロナであれば、全ての人が安全な水とトイレを世界中に、つまり衛生的な部分が全てしっかりと保証されているということも考えていけるのではないかなと思っています。このように、SDGsという視点で環境について迫っていくということについては、ある意味やりやすさ、しくみやすさがあります。先生方が様々な視点から物事を考えていき、子どもたちも社会の創り手、日本の創り手、地域の創り手としての視点を持つことが、中学生であれば可能なのではないかなと思います。ですので、このことについては、ある意味カリキュラムマネジメント的な部分も考えますとありがたいなと思っています。

あと、先程大戸委員からもありましたが、資料6のめざす将来の姿というところが、小学校中学校段階のものではないということは十分承知していますが、小中学生ではなかなか実践というところは難しくなってくるのかなと思います。実践しようとする姿であるとか、実践しようとする意欲であるとかそうしたところでくくってもらえばありがたいという面も正直ございます。

SDGsの視点で様々なものに取り組んでいくことについてはありがたいのですが、一方で、非常に幅広になってしまうので、環境に特化すると逆に難しくなってしまうところが出てくると思いますので、そういったところである程度焦点化した施策が必要になってくるのではないかと感じています。

阿部稔
委員

山形工業高校の阿部でございます。

退職まで3年を残して山形工業に赴任してきまして、今年最後になりました。

今年は山形工業にとりまして非常に大事な年で、創立100周年でありまして、それにふさわしいことが何かできないかと考えていたところ、生徒会では、100年に感謝しつつ、次の100年に向けての新たな取組みということで、「ネクストビジョン100」というテーマを作り、これからの未来につながる取組みをしたいということで、SDGsをテーマに何かものづくりをできないかということを生徒が色々考えました。そうしたところ、100周年を記念して修学旅行先を台湾にし、その際に台湾の工業高校と姉妹校締結をするということを計画しておりました。台湾には行けなくなりそうなのですが、姉妹校の締結はオンラインでやることですので、SDGsをテーマとして、台湾の高校との国際交流も進めていきたいと計画しているところでございます。

ものづくりのところですが、台湾工業高校との姉妹校ということなので、台湾の名産品であるマンゴーに注目し、山形でマンゴー栽培をしようということ考

えております。その際には、バイオマスエネルギーシステムを使ったり、スマホで遠隔操作ができるようなスマート農場を考えまして、ICTを活用した共同研究からSDGsを考える取組みを今進めております。これを日本SDGs協会の方にお話をしたところ、是非事業認定をしたいと言っていただきまして、今週月曜日に日本SDGs協会から事業を認定するという連絡がありました。聞くところによると、日本の高校では初めての取組みということですので、これを着実にやっていきたいと思っているところです。

宣伝になりますが、この件について、本日午後6時10分からのNHKやままるで放送されますので、ご覧いただければと思います。工業高校として、ものづくりを通してSDGsに取り組もうということをやっていますが、先程からのお話を伺っていると、マンゴーを作ることが目的でなくて、**資料6**にありますとおり、他人ごとでなくて自分ごとに気づかせるための取組みということで進めていければと思っております。

本校でも、色々ボランティアでの活動や各学科での活動、エネルギー教育であったり専門的なところまでやっている訳ですが、生徒はそれがSDGsの一つの取組みだということあまり考えずに、学習だからやっているとかボランティアだからやっている、そういった意識が強いのではないかと考えています。この機会に、環境問題を他人ごとではなく自分ごととして捉えられるような意識づけ、これを進めてまいりたいと考えているところです。

後藤委員

基督教独立学園の校長の後藤と申します。

小国町にある小さい私立の全寮制の学校です。学ばせていただく機会があり、感謝しています。

今日いただきました資料の中で心に留まったのは、**資料2**の「環境教育を通じた環境の人づくり」この言葉です。「環境の人づくり」は何を表しているのだろうかと思いつつなのですが、やはり環境教育は人づくりと切り離せない内容だと改めて教えていただきました。今日最初に学ばせていただいた研修の中でも、サステナブル、持続可能ということばなのですが、持続可能ということばは先程、どなたかおっしゃいましたけれども、環境教育とだけ繋げての内容ではなくて、人間関係、我々の職場をどうしたらよいかというような内容を含むと私は思っています。

このサステナブルというのは、本来的にどういうあり方が無理のない、続けていけるあり方なのかということを表していることばだと私は思っています。私たちの学校は非常に例外的で特殊な学校です。今は、北海道から鹿児島まで、全国から生徒が来ています。寮生活でスマホが使えない、インターネットがない、TVもない。三種の神器のようなものが高校の三年間ないという学校です。もちろん生徒たちは体験入学、説明会に来て、ここはこういう学校と分かったうえで、あえて不便な生活の中に入ってきています。本来、人間にはそういうITツールはなかったので、人間と人間の対話は基本的には相手からことばを聞き、こちらが発信し、というこれが本来的なあり方だと思います。サステナブルということ

ばは、本来的に人と自然の関係は何なのか、人と人との関係は何なのか、職場と何なのかということ問いかけていることばである感じがしています。今日は環境教育についての場ですから、人と環境との本来的なあり方何なのかを教育の現場では考えていかなければいけないということ突き付けられて、問われているのかなと考えていました。

「環境の人づくり」ということばですけれども、触れるということ避けられないと思います。やはり、子どもたち、生徒が、この環境を守らなければいけないということを実感することが必要です。単に知的なことではなくて、実感です。どういうふうにしたらこの地球や自分の地域を大事にしたいと思うだろうか。そういう思いがどこから生まれてくるかということは、触れる、そこで暮らす、生活するというを抜きにはやはり考えられません。

独立学園の場合は、森林の真ただ中で暮らしていますから、どうやったらナラ枯れを防げるか、どうやったら干ばつを、森林を守れるか。寮生活ですから、油が出たら排油をどうやって処理するか。それで石鹸を作ったりしています。日常と生活と環境とが繋がっていて、米も作っていますし、牛も飼っていますし、農作物も作っています。普通高校なのですが、生徒たちもそういったことを喜んでやっていて、牛の搾乳は、女性でも都会から来た子も後半には上手になるものです。つまり、生き物や自然に触れて、これを大事にしたいということ培うことが教育の中の環境教育の大事な部分ではないのかなと私は思っています。

森林学という授業があり、今年新潟県で林学技術指導を行っている専門の先生に来て指導していただき、我々の後継者育成にも資するようなことも行っています。

それから、高等学校ですからグローバルな内容も学びます。クジラの問題やインディアンとアメリカテキサス州のパイプラインの問題など、自分たちの問題と世界の問題を繋げることも大事なことで、教育現場としてはそのようなことを意識してやっていけたらいいと思います。

もう一つですが、これも昨年も言ったのですが、農業というものは環境教育を考えるにあたって本当にすばらしい教材だと思っています。米一つを作る、稲から種、苗から水田を作り、収穫まで一過程全ての中に、土壌学とか気象、色々な環境が含まれています。ですから、私は出来れば日本の教育期間の中で、稲作を必修の授業にして欲しいと訴えています。なかなかそれは夢ごとだと思うのですが、子どもたちが何かにトータルに関わる、触れるということ未来を創る子どもたちに残したいなと思っています。

田中裕子
委員

田中でございます。よろしくお願ひします。

事前にいただいた資料を拝見しまして、学校、地域等幅広い場における環境教育とか環境教育の担い手の発掘、育成というところを読ませていただいて、私も今、後藤先生がお話しなさったように農業というのは環境教育に最も適しているのではないかと感じたことがありましたので、それを一つ御紹介させていただきたいと思っています。

<p>田中吉弘 委員</p>	<p>今年の2月、地元のテレビ局で放送していたのですが、天童の農家の「ねぎ人カンパニー」の清水さんという若手の、異業種から参入し新規就農されたとても注目されている方がいらっしゃいますが、その方が天童の寺津小学校に農業部を作って、6年生を1年間、授業で種まきから収穫まで、野菜作りを行ったという模様を放送していました。</p> <p>稲刈りや田植えという短期間の学習体験はよくあることですが、そこでは1年間、種まきから収穫までやるので、お天気を心配したり、土のことを心配したり、どんな農薬、肥料をやるか、そういったことから始まるのです。</p> <p>その収穫した野菜を、今度は修学旅行先の東京のスーパーマーケットで販売することになり、子ども達にとっては本当に貴重な体験になったようです。このように長期にわたって環境に直接深くかかわる農業を体験することは、間接的にはありますが、環境教育にも繋がりますし、子どもたちはそれを意識することはあまりないかもしれませんが、この中に環境、経済、社会という3つの側面の相互の関係を踏まえるということもあります。</p> <p>自分たちがこのものをいくらで売るか、包装紙をどうするか、プラスチックを使ったらごみが出るよね等、色々なことを考えながら、どうやったら売れるかということを実際に真剣に考えていて、1時間あつという間の番組でした。</p> <p>これを色々な側面から視点を変えてみると、環境教育と農業体験というのは本当に密接な関係があって、相互的に効果が表れてくるのではないかと思ったところです。</p> <p>今コロナで大変な時期で、そういった密接な関わりが出来るかどうかや、今子どもたちをこの環境の中でどうしたらいいのかというのは難しいかと思いますが、他県では、修学旅行の行先を今まで東京や観光地の有名などところに行っていたけれども、逆に地元を知らないということで、地元で修学旅行の旅行先を変えたということも見たことがありますので、地元を知る、地域を知る、そして環境教育に繋がるということで色々なメリットがあるのではないかと思ったテレビ番組でしたので、紹介させていただいたところです。</p> <p>同じく田中でございます。</p> <p>南陽市社会教育課で放課後子ども教室を担当して5年目になります。特に環境学習の活動として、環境科学研究センターの先生方をお招きして、エコリサイクル工作、段ボールやトレットペーパーの芯等を使っての工作、また、NPO 法人美しいやまがた森林活動支援センターの先生をお招きして、みどり環境税を使って、竹水鉄砲やミニ門松づくり、フォトフレームづくり等の色々な木育教育の体験活動をさせていただいているところです。</p> <p>例年、係は違いますが、南陽市の連合婦人会の団体の役員の方々が環境科学センターから講師をお招きして、座学を行っています。直接、環境科学研究センターへお邪魔して体験学習等をしていることもあったようです。今年度はコロナの関係で、子ども達はなかなか活動が出来なく、中止という場面ばかりだったのですが、2学期からは規模を縮小し、三密を避けながら、当初計画した活動等をや</p>
--------------------	---

<p>阿部英子 委員</p>	<p>っていきたいと考えているところです。</p> <p>先頃、環境科学研究センターの YouTube 等を拝見させていただきましたが、こういった YouTube やネットを使った環境学習というものもとても気になります。今後も、例えば夏休みの自由研究やものづくりなどにも活用できるような動画配信や呼びかけなど、情報発信をより一層進めていただければと考えているところです。今後も、こういったセンターの先生方等をお招きしての環境学習や更に色々なことを子ども達と仲良く活動していきたいと考えているところです。</p> <p>阿部英子と申します。</p> <p>庄内電気設備えねこステーションという酒田の創業 50 年になる地元の会社に勤めております。えねこステーションというのは何かと申し上げますと、震災を機にエネルギーのあり方を考え直そうということで、再生可能エネルギーを中心とした生活を提案するためのスタジオになっております。今は本社のある酒田市大宮の築 40 年の雨漏りするような倉庫をリノベーションしまして、そこにスタジオを構えて 3 年が経ちます。安全創蓄連携型の太陽光パネルで発電し、蓄電池で蓄電し、そこで料理も出来る、お湯も沸かせる、エアコンも使えるというようなスタジオで、皆さんのコミュニティースペースとして、毎月、野菜ソムリエの先生をお招きして、地元のお野菜を使った料理教室をやっております。2 月を最後にコロナの影響もありお休みしていたのですが、少人数制ならということと、テイクアウトで飲食はしないことを前提に、先月から再開しました。参加して下さる方がたくさんいて、2 部制や 2 日連続の形にして行う程反響があったので、とてもうれしく思います。</p> <p>それ以外に環境学習として、冬場から梅雨前の期間限定になりますが、地元の豆を使っての味噌づくりを行っています。今、大豆ビジネスが盛んですけれども、その大豆の畑はどこにあるのかということを考えてもらうということで、アマゾンの森林を伐採して焼いて畑にしたり、地球の灰であるその場所から大豆ビジネスが始まっているということについて話をすると、大人でも親子でも、環境のこと、地球温暖化のことについて少し耳を傾けてくれ、加えて、半年たって味噌のおいしさに皆さんが虜になって必ずリピーターとしておいでくださることがうれしくて継続しているような感じです。</p> <p>SDGs を考えてみますと、7 番の「エネルギーをみんなにそしてクリーンに」、そして 13 番の「気候変動に具体的な対策を」ということを掲げて、毎月、庄内と秋田の南部の地域に配布されるクイッキングというフリーペーパーに広告として、地元の野菜を使った日替わりレシピを提案させていただいています。これからの環境に対するエネルギーの考え方を少し考えていただこうと思い、SDGs の 17 項目と毎月会社で開催しているイベントを提案させていただいています。</p> <p>それから、地元の遊佐町役場の消費者の会やロータリーさんの研修受入れ、また、イオンで行っているチャレンジキッズで、毎年エネルギー等をテーマとして研修会をしており、昨年はそのお手伝いさせていただきました。大人数は受け入</p>
--------------------	--

<p>今村会長</p>	<p>れられないのですが、背伸びはせず、出来ることを継続してきて良かったなと思っております。</p> <p>その中でも、完全自給自足型の家やエネルギーのようにディープな考え方や、食材等の完全無農薬等、偏ったことではなく、肩肘張らずにやってきたというところでは、今、環境教育施策の展開方向のたたき台を拝見し、楽な気持ちで取り組んだ方がいいのではないかと自分の中でも安堵したところです。</p> <p>自分で出来ることはささやかなことで、昨今は集まることがなかなか出来ない状況ですが、SNSで発信することも方法としてあるので、そういったこともやっていきたいと思います。</p> <p>一応、御出席の皆様から意見いただきました。</p> <p>今日の意見については、次回まで環境企画課でまとめていただいて、次のものに生かしていただきたいと思います。</p> <p>若干私からも申し上げます。先程ありましたけれども、行動計画も環境教育指針もですが、これを誰がいかにか普及していくかということは本当に課題だと思います。その辺の結論は出ないかもしれません。極端に言うと、環境的な行動というのは、やれることを出来ることをやる。そして普及もやれることをやる。出来ることをやるということになれば、そこまでしゃかりきになって普及するというか、一生懸命に街頭に立ってパンフレットを配らなくてはならないとかそういうことではないと思います。これが環境教育というものの非常に難しいところなのだと思います。ただ、行動計画がある、そしてそれを使ったら若しくはそれに照らし合わせると、県もそれを推奨してくれていることになる。環境教育指針であれば、山形県の教育としてもこれが土台にあり、自分たちは間違っていないという後ろ盾になる。教育というものはじんわりしたところがあるので、後で振り返って、行動計画や環境教育指針が使えるんだなというふうに出ればいいのかと思います。</p> <p>SDGsに関して今日のお話の最初にありましたけれども、世界中のあらゆる問題をとにかく整理してやっと17になったということですから、あらゆる問題がここに入っているわけで、この全ての問題に対して我々が取り組んでみましようとは出来る訳がないと思います。その場合、SDGsからあるゴールを取り出してカリキュラムを作る方法はあるのですが、そのようなトップダウンのやり方になると最終的には形骸化してしまう危険性があります。あまりSDGsを意識しないで、今までやってきてこれは良かったと思う環境の取組みが出来た時に、それを後からSDGsではどれに該当するのかというボトムアップ型で見るといのように、どちらかというSDGsは指標ですので、SDGsに関しては自分達がやったことを正当化できるものだというふうに見ています。だから、何をやってもSDGsに貢献している、そのことが非常に大事なのかなと思います。みんなで打ち出して、旗降って引っ張っていくことも大事なのですけれども、かえってそれが強すぎると、実際に学校や地域でやられる方に対して負担が大きくなるので、そこまで上から下ということではなくてよいのではないかと思います。</p>
-------------	---

ですから、環境教育指針を作った時も、こういう指針があるけれども資料にしろもらって、どことどの能力がこのプログラムでは育成できたというように、自分のやったことに対する評価を、ここができた、ここができたということをしていく、そうすると非常に多くのところが出来てきている、そのような足し算系のものでいいのではないかと思います。最初に高いところの目標があって、そこからどこが出来ました、出来ませんという引き算の評価の仕方は流行らない。引き算になると暗いですよ。ここまでやろうとしたけど、ここまでしか出来ませんでしたとなると、何だよという話になるので、そうではなく、これをやろうと思ったけれどもこっちが出来た、これだけ出来ましたという足し算の方がいいのではないかと思います。多分、環境と言うのは、やっている最中に子どもたちが思わぬところで思わぬ能力を発揮するということがあって、それならそちらが伸びればそれでいいのではないかと思います。先程後藤先生もおっしゃいましたが、最終的には人づくりというところが中心になります。人としてどういくかということですよ。

SDGsの場合には課題ベースでの分類ですから、人間そのものの能力の分類ではありません。2種類次元があって、我々は人間そのものの能力ベースで考えた育成を考えていて、たまたまその時に取り扱う課題、あるいは環境が、SDGsのどこに関わっていたのかというふうにしていけばいいのではないかと思います。

なお、「自分ごと」ということが最近普及されてきて、私も非常にうれしいと思っていますのですが、環境ではもう40,50年前からオーナーシップということばが使われており、自分自身の所有者意識というか、これは俺のものだと思っていれば、汚されたら嫌だし、もっときれいにしたいと思うし、自分ごとにしては、自分のものとして扱うんだというもう一歩踏み込んだものではないかと思っています。

先程後藤先生が米作りしたらとおっしゃいましたが、自分が育てたものですから、やはりそれに対してプライドがあって、「自分ごと」というよりは所有者としてやられていると思います。山形県に住んでいる私たちは、近所の地域は私達自身のもので守りたいと思えるものが芽生えるといいのかなと思います。

また、「正しく理解し」、「当たり前」ということを大戸先生から御指摘いただいたのですが、私は教育の中では「正しく理解し」という言葉は使いません。科学には、「妥当」はあるのですが「正しい」はないです。ですから、その辺は言い回しが非常に難しいとは思っています。

「当たり前実践している」というのは、阿部委員がおっしゃいましたけれども、当たり前というのは、普段無理せず実践しているということだと思います。そうすると、学年や年代に合わせて、それぞれの人に合わせた個別の理解と当り前の実践ということではないかと捉えていければいいのではないかと思います。付け加えるとすると、「個々の事情に合わせた」、「個々に合った」等の文言を加えればどうかという気はします。

山形県の行動計画で示すのはより具体的な行動、アクションでなければいけな

	<p>いので、是非そういうものとなるように、また、行動してみたら当然チェックが出来る行動計画でなければなりません。自分で振り返って、これが出来たとか、これはもっと頑張れると思えるものが出来れば、示唆出来ればいいのではないかと思います。今日の委員の意見を踏まえて、また次回御提案いただければと思います。</p>
--	--

—議事終了—

(5) その他

(6) 閉 会